HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレスの時間論における「今」の二つの機能
Author(s)	西田, 伊知郎
Citation	哲学, 43, 21-36
Issue Date	2007-07-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35044
Type	bulletin (article)
File Information	43_RP21-36.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アリストテレスの時間論における「今」の二つの機能

西田伊知郎

はじめに

我々が「時間」について考えるときには、大別して二つの側面がしばしば問題として取りあげられる。一つは時間の順序、先後関係であり、もう一つは過去・現在・未来の時間様相である。一方は時間を、順序づけられた時点ないし時間間隔と見なし、他方は時間を、存在にかかわる何らかの様相とみなす。どちらも時間の本質的な特徴のように思われるが、しかしこの二つの側面は必ずしも調和的と見なされず、時間にとってどちらの側面が基礎的なものであるかといった論争も後を絶たない。

この二つの側面は、アリストテレスの時間論において、双方相まって一つの難問を構成している。それは、時間の非存在を導く難問である。まず、時間様相の特徴から時間の二つの部分の非存在が導かれる。

〔時間の〕一方はすでに経過して存在せず、他方は来たらんとしているが未だ無い。しかるに、無際限の時間もその都度把握された時間も、これらから成っている。だが、存在しないものから成っているものが実在に与ることはできないと思われよう。（217b33-218a3）

すでに経過した時間は過去であり、やって来る時間は未来である。どちらも、「在った」「在るだろう」とは言えても、「存在する」とはいえない。だが、現在との対比によって過去と未来の非存在が導かれるなら、かえって現在は「存在する」のであり、時間は現在があることによって存在を認められるのではないか。しかし、アリストテレスは時間のもうひとつの側面を利用して、議論をたたみかける。

> 他方、「今」は部分ではない。部分は〔全体を〕はかり、全体は部分から成っていなければならないが、時間は複数の「今」から成ってはいないと思われるからである。(218a6-8)

アリストテレスにとって勝義の「今」すなわち現在は幅をもたない。時間様相のみを考慮したときには問題にならない時間の幅が、ここでは「全体は部分から成る」という原則に照らして重大な帰結を導いている。幅のない時点を集めても、幅をもつ時間を構成することは（少なくともアリストテレスの立場では）できないのだから、現在が「存在する」と言ったところで時間の存在を確証することはできないのである。

注目に値するのは、「今」（ト・ニュン）という彼の用語法である。この語は時間様相の「現在」に相当する使われ方をしつつ、同時に、順序づけられるべき「時点」の謂いであるようにも語られている。「今」が二つの側面を併せ持つことによって、上記の難問はまさに難問として成立している。さらに、「今」が時点であるならば、「今」は複数存在すると考えるのが自然であろうが、しかし「今」が現在であるならば、「今」は、今現在のひとつきりであるとも思われる。こうしてみると、二つの側面を両立させることは困難であるように見える。

本稿は、アリストテレスがいかにして「今」に二つの側面を帰属し得たかを解明するための試みである。初めに、時間の存在が認知される原初的な場面において既に二つの「今」が登場すること、そして二つの「今」の指定が運動

のへより先とより後〉という概念に依拠していることを確認する（1節）。ここでは「今」が時点としての役割を持っていることのみが前面に現れている。しかし二つの「今」の指定が端的に順序づけられず、運動のへより先とより後〉に依拠するのは、「今」が現在であり、様相抜きの先後関係には置かれていないことの裏面である（2節）。他方、まさに運動のへより先とより後〉に依拠することによって、「今」は二つめの「今」への通路を手に入れる。それは運動が非自己完結的なものであることによる。「今」が複数現れることによって唯一の現在という様相的側面は失われるように見えるが、しかし現在の「今」から過去・未来双方に開けた二つの展望が区別されることによって、時間の様相的側面は或る程度まで保持される（3節）。この区別は『自然学』Γ巻のいわゆる運動の定義を参照することによって可能であることが示される（4節）。最後に、どの「今」からもそれを原点とした展望は開けていると思われるが、複数の原点の存在が「今」の様相的性格を抹消することにはならないことを示す（5節）。

1　時間が存在するには二つの「今」が必要である

最初に、時間が存在すると言われる最も基礎的な場面を確認しておこう。『自然学』Δ巻11章において、アリストテレスはまず時間が運動抜きには存在しないことを確認する。そして、時間のへより先とより後〉が運動のそれに準じ、運動のへより先とより後〉は場所的拡がりのそれに準ずるという仕方で存在することの確認がなされる。その上でアリストテレスは、どんなときに時間がたったと言えるか、その条件を示す。ただしここで運動と呼ばれているのは、場所移動に限らない変化一般の代表である。Δ巻10章末尾で付言されているように（cf.218b19-20）、この箇所では変化一般と運動は特に区別されていない。

「運動を、運動のより先とより後の識別によって区分するときにこそ、時間は認知される。そして「時間がたった」と我々が言うのは、運動の内のより先とより後の知覚を得るときである。さて、それらが別々のものであり、中間に何かそれらとも異なるものがあることを把握することによって我々は区分するのだが、両端が中間と異なると思惟し、「今」がより先とより後で二つあると魂が語るとき、そのとき時間もあると我々は言うのである。時間は「今」によって区分されたものだと考えられるからであり、これは前提としよう。」(219a22-30)

「今」そのものが知覚されるのではなく、「今」は運動ないし変化の知覚によって指定される。より具体的には、その運動よりも前の事態と、その運動よりも後の事態の知覚に対応して「今」は指定される。何かしらの事態がただ知覚されるのではなく、運動の存在を前提し、運動の〈より先〉〈より後〉という条件込みで事態が知覚されていることに注目しよう。現にある事態をただ知覚しても、時間を背景に伴った「今」、時間の相関者としての「今」を把握することにはならない。そして時間を背景に伴った「今」はもうひとつの「今」と識別されねばならない。というのも、時間は「今」を集めて構成されるような時点の集合体ではなく、線が両端によって区切られるように二つの「今」に挟まれた間隙として、「今」の背景にあるものだからである。時間の存在はその両端を指定することによって認知される。だが、事態単独の知覚によっては二つの「今」が識別されておらず、したがって時間の認知に至らない。

他方「今」は時間を区分するときのみ、時間的意味を持つ。そして時間の相関者ではないような「今」の存在をアリストテレスは認めない。「時間なくして「今」は無く、「今」なくして時間もないことは、明らかである」(219b33-220a1)とある通り、時間と二つの「今」の存在は或る意味で切り離せない。かくして時間の認知には運動の〈より先とより後〉という、二つの「今」を指定する条件が必要なのである。

ここには既に、二つの「今」があると「いつ」魂が語るのか、この「今」と失われた(ないしまだ無い)「今」が

いかにして識別できるのかという問題が潜んでいる。もちろん、二つの「今」を単なる時点として扱うならばこうした問題は生じない。アリストテレスは結局、「今」を時点と同一視しているのだろうか。そうではないと思われる。次節では、アリストテレスが「今」の指定を運動の〈より先とより後〉に託した理由が「今」の様相的側面からくる制限にあることを考察しよう。

2　二つの「今」は直接通覧できない

前節で示されたのは、「今」何が起きているかを把握するとき、運動の〈より先とより後〉を介した時間の認知が背景にあるということであった。ただし、運動の〈より先とより後〉を介さずに、直接任意の出来事を時間的な展望の下に置くことができるわけではない。複数の出来事を同時性の下に置くことはできても、時間的な展望は運動が〈より先とより後〉によって示す展望によってのみ、この「今」つまり現在から開ける。このことは、二つの「今」がある一つの運動に従って把握される点に表れている。[1]

ある一つの運動に依拠せぬまま、複数の「今」を順序付けることはできない。運動に依拠する必要性は、複数の「今」を、特定の「今」からの展望に縛られずに通覧できるような、「どこからでもない〝展望〟」を持てないことに起因している。もし「どこからでもない〝展望〟」が可能であれば、運動の〈より先とより後〉抜きで時間の先後関係を語ることもできたであろう。時間の先後関係を語るために複数の「今」を直接通覧できるなら、その先後関係の一例に過ぎない運動の〈より先とより後〉を媒介する必要など無いからである。そして、二つの「今」は端的に先後関係にある二つの時点として把握されるであろう。だがむしろ、二つの「今」を違うものとして今現在語るにも関わらず、眼前に並置するような仕方で差異を今現在見出すことが不可能だからこそ、一つの運動に依拠することが必要になる

のである。[2]

運動の〈より先とより後〉に依拠するという条件にはときおり論点先取の疑いがかけられている。すなわち、アリストテレスは時間の〈より先とより後〉を運動の〈より先とより後〉に還元して理解しようとしているが、運動の把握に先立って時間的な順序の理解がなければ、運動の順序から時間的な順序を導出することはできない。運動の〈より先とより後〉とは、運動を時間の順序に従って配置したものに他ならず、アリストテレスの還元の試みは事の次第を取り違えている。[3]

たしかに上記の批判は、運動の〈より先とより後〉を時間的な意味を含まない仕方では解釈しづらいために一定の説得力を持っている。アリストテレスは運動の〈より先とより後〉とは別に時間の〈より先とより後〉についても語るのだから、運動のそれが時間のそれを含んでいてはならぬと考えるのも無理はない。例えば100m走で走者Aが他の走者Bよりも先に走り終えたとすれば、この〈より先〉はもちろん運動の〈より先〉ではなく時間の〈より先〉である。[4]というのも、先着した走者Aの運動の〈より後〉は、遅れた走者Bの運動の〈より先〉でも〈より後〉でもあり得ない。走者の異なった別々の運動だからである。

しかし、遅れた走者Bの運動が未完結である、完結以前であるということぬきに、先着した走者Aが〈より先に〉走り終えたと言うこともできない。時間的順序をつける手順を辿ってみよう。まず走者Aが走り終えたとき、そのときには走者Bはまだ走り終えていない。そして走者Bが走り終えるのは、（Bの運動の〈より先とより後〉の意味で）運動中よりも後のことになる。したがって、まだBの運動が完結していなかったとき走り終えた走者Aは、（時間の〈より先とより後〉の意味で）走者Bよりも先に走り終えたと言える。つまり、二人の走者が時間的に前後して走り終えたというためには、同時性の概念と運動の〈より先とより後〉が必要なのである。

このように、運動の〈より先とより後〉は、他の運動との比較ぬきの時間的な先後関係を示し、これを前提として

複数の運動が同時性の下で比較されるところに時間の〈より先とより後〉がある。逆に言えば、複数の運動に時間的先後関係をつけるには一つ一つの運動が持つ〈より先とより後〉に頼らざるを得ない。したがって、アリストテレスの眼目はまさに我々が時間的先後関係の意味を運動のそれから汲み取っていることにある。よって運動の先後関係が時間的な意味を持っていると批判するのは、水を汲んだ井戸の中に水があると不平を言うようなものであろう。[5] 時間的意味を含まない先後関係によって還元主義的に時間の先後関係を導出しようという試みは、その成否はいざしらず、アリストテレス自身のものではない。

むしろ問われるべきは、次の問いである。運動の〈より先とより後〉に依拠すると、どうして今現在、つまり一つめの「今」にありながら二つめの「今」への通路が開けるのか。運動はいかにして、一つきりの「今」の向こう側に二つめの「今」があることを教えるのか。

3　過去と未来、二つの展望

直接通覧できないにもかかわらず、二つの「今」の指定を運動の〈より先とより後〉が可能にするのは、運動がその終点を自らの外に置く、非自己完結的な（アテレースな）ものであることに依っている。運動のこうした特質は、現実活動態（エネルゲイア）との対比によって浮かび上がる。『形而上学』Θ6においてアリストテレスは次のように語る。運動には終点（ないし目的）があり、運動そのものは終点に限界づけられた、終点とは異なるものである。つまり、動くものは動いている限り、まだ終点に達していない。また、終点にあればもう動いていない。逆に、自己完結的な活動は終点が活動そのものに内在しており、終点にあって活動しつづける。これは現実活動態と呼ばれる（cf.1048b18-36）。

そしてこの判別のために、いわゆるテンス・テストが用いられる。このテストは運動ないし活動を表現する動詞について、その完了形と進行形を同居させて語ることが可能か否かによって、現実活動態と運動を判別する。例えば、学習しているときには学習してしまっていると言えないが、見ているときには同時に見てしまっている。したがって前者は運動であり、後者は現実活動態である。そして一般的には、「生成しておりかつ生成してしまっていることも、動かされておりかつ動かされてしまっていることもなく、むしろ〔これらは〕異なる」(1048b31-33)と言える。

アリストテレスが、自然学の根本前提として運動の存在を認める(cf.185a12-3)ということは、運動の成果が現れているときには同時に運動しているのではなくそれ以前に運動していたのだ、というズレを認めることに等しい。このズレが、運動の成果のみが現れているときにもそれ以前に運動があったことを告げる。運動の〈より先〉に立ったときも同様である。いったん運動の存在さえ認めてしまえば、眼前には運動の〈より先〉か〈より後〉か、どちらか一方しか無いにも関わらず、その向こう側に他方の存在が認められる。してみると、運動の〈より先とより後〉に準ずる「今」についても同様の結論が導かれるのは明白であろう。二つの「今」は展望ぬきの端的な先後関係にあるのではないが、必ずどちらかの「今」から見て先後関係が付されるという制限の下で、反対側の「今」の存在を認めることができるのである。

以上のように一つの「今」から二つめの「今」への通路が開けたことはよいとしよう。だが、二つの「今」の先後関係はどうなるのだろうか。「今」が複数になったことで、時間様相としての「今」は用済みになり、後はただ時点として扱えばよいのだろうか。たしかに唯一の絶対的な現在という性格は、手放されることになる。しかし「今」の様相的性格は、それでも失われていないと思われる。アリストテレスが時間の〈より先とより後〉を語るとき一見奇妙な順序づけをすることに、こうした事情の反映を見ることができる。

「過去と未来の時間では、〈より先〉ということは逆さまに語られる。過去においては「今」からより遠いものが〈より先〉、より近いものが〈より後〉だが、未来においてはより近いものが〈より先〉、より遠いものが〈より後〉である」(223a8-13)[6]

コリシュはこの箇所について、時間の端的な先後関係と過去・現在・未来の時間様相を複合させてしまったために、先後関係の説明として不十分なものになってしまっていると断ずる。すなわち、過去の時点どうしや未来の時点どうしは比較できても、この説明では過去と未来の二つの時点の先後関係が語れない。このことは「今」から等しい遠さにある過去と未来の二つの時点を考えれば明らかだ、というのである。[7]

しかしこれだけなら、過去の時点が未来の時点よりも先であることを付言すれば話は済んでしまう。むしろコリシュの批判は、一つきりの「今」から二つめの「今」へ通路が開けたとき、それが過去と未来のどちらの方向の展望をもたらすのか区別は付けられないのではないか、という疑念が根底にあると思われる。ただ現にある事態を知覚しただけでは「今」の指定に不足であったことを思い出そう。現にあるということなら運動の〈より先〉でも〈より後〉でも変わりはないのではなかろうか。今現在、自分の見ているこの状態は運動の〈より先〉なのか、それとも〈より後〉なのか？

しかし逆に、この区別さえ付けば、自分がこの「今」から過去を展望しているのか、それとも未来を展望しているのかについても区別が付けられると言えよう。そして二つの異なった展望があることによって、「今」は様相的性格を留めることになろう。かくして、運動の〈より先とより後〉に何らかの非対称性があるか否かが分水嶺となる。

4　可能態と〈より先〉、完全現実態と〈より後〉

前節末尾の問いに答えるために、『自然学』Γ巻におけるアリストテレスの「「運動」の定義」を参照しよう。[8]

「（イ）可能なものの、（ロ）可能なものとしての、（ハ）完全現実態（エンテレケイア）が運動であることが明らかである。これ［運動］があるということ、そして、動かされるということが起きるのはこの完全現実態のあるときであり、より先でもより後でもないということも、明らかである。」（201b4-7）

家の建設を例にとると、家の素材である石や木は、家の可能態である。そして煉瓦や木は、家の可能態であるとき、現に煉瓦や木であり煉瓦や木の完全現実態である。したがって、（イ）「可能なものの」という限定は、現に家ではないが家になり得るもの、煉瓦や木の指定であり、運動の終点たる家は運動から排除される。すなわち（イ）「可能なものの」という限定が運動の〈より後〉を運動から区別するための条件としても働くことが分かる。家が完成したとき、家は家の完全現実態にあることによって、家の可能態とは異なり、家の可能態よりも後にあることをおのずから示すのである。

次に、（ハ）の完全現実態であるが、千葉によれば、この完全現実態は家のそれではなく、家になる石や木の完全現実態である。つまり、（イ）の限定における「～の（完全現実態）」という属格は、可能態が属する「もの」に同時に完全現実態が帰属することを表現した帰属の属格として読まれねばならない[9]。ただし木の完全現実態といっても、木が自らの自然本性に従っているだけでは、家の建設が行われているとは言えない。大工が外から能動者として動かすことで初めて、建設という運動を木が受け取る（アリストテレスにとって動くとは、動かされることである）。

ここで（ロ）の限定が必要になる。アリストテレスが青銅から像を造る例によって説明するところでは、「銅は可能態において像だが、銅の、銅としての、完全現実態は運動ではない。銅であることと可能態において何か動かされうるものであることは、同じではないからである。というのも、それらが端的につまりロゴス上同じであったなら、銅の、銅としての、完全現実態が、運動だったろうからである」（201a29-34）。つまり、こういうことである。銅のもつ属性は、彫刻家によって力を被るとき、像の制作に必要な（例えば）適度な柔軟性を発揮する。この性質は銅のものであり、銅であるならば当然、能力として持っている。したがって、或る意味でこの性質は銅が能動的に発揮しているものでもある。しかし、この性質が、「像の完成へ向けて発揮される柔軟性」であることは、彫刻家の能動的な働きかけ抜きには語ることができない。この能動者との協同によってはじめて、当該の性質は「像の完成へ向けて発揮される柔軟性」という意味を持つ。

ということは、銅の自体的同一性にも複数の意味があり、銅が「銅として」同一である限り能動的に発揮する能力は、別の状況では、例えば銅が像になりうるものとして自体的同一性をもつとき、像の完成へ向けて発揮される受動的な能力なのである。そして、この「像になりうるものとしての」銅に属している完全現実態が運動として同定される。[10] 同様に、煉瓦や木に属する完全現実態にも、煉瓦ならば「煉瓦としての」それとは別に「家になりうるものとしての」完全現実態もあり、各々の同一性の条件は異なる。煉瓦が煉瓦としての完全現実態にあるときは、そこにはまだ運動はない。しかし大工の手によって煉瓦の能力に「家になりうるものとして」という意味が賦与されているときには、煉瓦は家の完成へ向けて動かされつつある。このように、（ロ）（ハ）の限定を組み合わせることで、今度は運動の〈より先〉と運動とを区別することが可能になるのである。

運動の前後には二つの完全現実態が見出される。煉瓦と家がこれにあたる。そして完全現実態にあるものは同時に他の何かの可能態であり得る。動かされていない煉瓦は家の可能態として把握されることで運動の〈より先〉となる。

さらに、もうひとつの完全現実態、完成した家のそれは、ただそこにあるゆえにではなく「それになった」がために運動の終点であり、完全現実態として把握されることによって運動の〈より後〉である。運動の〈より先とより後〉の非対称性は、かくして見出された。

アリストテレスにとって必要なのは、「今」を原点にして順序づけるとき、過去と未来のどちらを向いて数えているのか区別がつけられることであった。この区別が、上記の完全現実態と可能態の組み合わせによって可能になる。今現在にあるものも、完全現実態として把握されればその完全現実態へと向かう運動が対として背景にあり、過去への展望をもたらす。逆に何かの可能態として把握されれば、未だ何の可能態として動き出すか不定であるにせよ、適当に仮定された運動が未来への展望を（予測・想像として）もたらす。アリストテレスは「今」について繰り返し「過去の終点であり未来の始点である」と述べるが、これは修辞のレベルに留まる表現ではない。「〔「今」という分割の〕指標はより先の〔時間の〕それとより後のそれの双方に共通であり、数的に一つで同一だが、ロゴス上同一なのではない。一方のそれは終点であり、他方のそれは始点なのだから」（263b12-14）。同じ一つの「今」が二つの判別を可能にするとはいえ、「今」は過去の限界と未来の限界として別々の規定を持っているのである。

5　複数の原点と展望

同じ一つの「今」から、過去方向と未来方向の二つの展望を得ることができる。しかし、これで事が済んだと考えるのもいささか早計である。一つの今現在から二つめの「今」へ展望が開けているならば、その二つめの「今」からもこちらの「今」を向いた展望が開けていよう。向こうとこちらとでは展望の性格が過去と未来で逆にはなるが、どちらも展望の原点として今現在を名乗る資格をもっていると言うべきではなかろうか。とすれば、どの「今」も今現

在であり、この「今」をとりわけ原点として採用する理由はないことになる。このような相対性はまたしても「今」を様相から切り離し、単なる時点として捉えることを迫っているのではないか。

たしかに、先述したように唯一絶対の「今」という在り方は失われる。だが、複数の原点の存在が、自分の位置する原点がどこであるかまで見失わせるわけではない。例えば0から自然数列を数えたとき、7と10では7の方がより先であるが、5の位置から出発して(いわば5を0として)1、2、と数えても7の方がより先である。20から、-1、-2、と逆に数えても構わない(ちょうど「今」から過去方向を展望したときのように)。いずれにしても7と10の順序そのものは変わらない。しかし、「どこから数えるか」ということには無視し得ない違いがある。この例で複数の数の位置から7と10を数えたとき、初めに「0から」数えられた元の自然数列とは別に、「0とは別の位置から」数えた自然数列があり、このような二重の原点を混同せずに理解できる能力が計算には重要な意味をもつ[11]。「7から数えて3つめ」という表現が理解できなければ足し算すらおぼつかないが、7から数えた結果、3つめにあたる10を3と混同してしまうとすれば、全てはご破算である。

同様に、時間の〈より先とより後〉をしるしづける「今」は、どの「今」を原点として考えても付される順序は変わらないものの、どの「今」から時間を数えるか、という違いを持っている。そして元の原点にあたる「今」とは別の「今」から展望すればどう見えるかを、元の原点に立ったまま仮想的に把握することもできる。アリストテレスの好んだ例を転用すれば、もし同じ坂に上り下りの違いがあることを理解できないとすれば坂についての理解が不足していると言わざるを得ないように、時間上で付された順序についても、この「今」から見ればあの「今」は過去に属するが、あの「今」から見ればこの「今」は未来に属するという違いを理解できない人は時間についての理解に欠けたところがあると言うべきであろう[12]。しかも「あの」今から見た展望は「この」今から想定しうる。「あの」今においても「この」今からの展望は想定できるであろうが、元々の原点がどこにあったか、その違いは残される。

初めに原点として取られた「今」が、どうして「あの」今ではなかったのか、そう問いかけることは確かにできる。[13] だが、初めに指定された「今」が「この」今であることは揺るがない。弱められた形であるとはいえ、アリストテレスは「今」に様相的性格を残していたと結論づけることは許されよう。

むすび

本稿は運動の〈より先とより後〉の概念に着目することで、「今」が現在と時点という二つの側面をもつことの理由を解明しようと試みた。「今」は時間の展望がそこから開ける原点として様相的性格を持つが、そのことと複数の「今」があることは調停しうる。

「今」と時間の関わりについて、特に時間の無際限な分割可能性に関わる論点については全く触れることが出来なかった。この点については他日を期したい。

1 常に同じ運動に従うという意味ではない。そのつど依拠する運動は異なっても、時間の認知に支障はない。

2 ここには、もはや無いものと現にあるものの差異を、一方は既に無いにも関わらず把握できるのはなぜか、という『デ・アニマ』にも通底する問題がある。この点については田島（1996）の卓抜な論考があり、本稿もこれに多くを負っている。

3 代表的なものとして、Corish（1976）がある。

4 アリストテレスは同じ間隔を通過する二つの運動を比較して、もう一方よりも先に通過し終えるものを「より速く動く」とした上で、この「〈より先〉は時間のうちにある」（223a4）とする。

5 McGinnis（2003）pp.160-161の指摘するように、我々が循環を見出すのは、運動を時間の関数として捉える現代的な観点に立つ

ためであろう。この点について、次の大木（2006）pp.38-40の見解は適切である。「アリストテレスの考え方は、一部の解釈者の目から見れば逆転しているように感じられるかもしれないが、しかしアリストテレス自身の考えの内部で循環（たとえば、「時間的」なタームによって「時間」を定義するといったような）が生じているわけではないのである」（p.40）。

6 同様の順序づけは Met.Δ11, 1018b14-19にも見られる。

7 cf.Corish（1978）p.74

8 この箇所の重要性に見合う検討は本稿の範囲を大幅に越える。以下の解釈は多くを千葉（2004）に負っている。

9 cf. 千葉（2004）p.12

10 cf. 千葉（2004）pp.12-15

11 この例はカッシーラー（1994）pp.492ff から拝借した。

12 ときおりマクタガートのA系列とB系列の区別を用いてアリストテレスをいわゆるB系列論者とする見解が見られるが、この点を考慮すれば少なくとも何らかの留保は必要だと思われる。先後関係ぬきの時間様相も、時間様相ぬきの先後関係も、アリストテレスの観点からすれば成立しえないものであろう。

13 もっとも、これはナンセンスな問いではないかという疑いも私は持っている。この点については稿を改めて考えたい。

（参考文献）

Corish, D. [1]（1976）'Aristotle's Attempted Derivation of Temporal Order from That of Movement and Space', *Phronesis* 21, 241-251

――― [2]（1978）'Aristotle on Temporal Order : "Now," "Before," and "After"', *Isis* 69, 68-74

Gill, M. L.（2004）'Aristotle's distinction between change and activity', *Axiomathes* 14, 3-22.

Graham, D.（1999）*Aristotle Physics Book* Ⅷ（Clarendon Press）

Makin, S.（2006）*Aristotle Metaphysics Book* Θ（Clarendon Press）

McGinnis, J. (2003) 'Making Time Aristotle's Way', *Apeiron* 36-2, 143-169.

Ross, W.D. (ed.) (1936) *Aristotle's Physics* (Clarendon Press)

——— (ed.) (1924) *Aristotle's Metaphysics* (Clarendon Press)

Sorabji, R. (1983) *Time, Creation, & The Continuum* (Duckworth)

Waterlow, S. (1982) *Nature, Change, and Agency in Aristotle's Physics* (Oxford University Press)

槇村恒一郎 (2002)『時間の本性』(勁草書房)

大木崇 (2006)「アリストテレスにおける〈時間〉の定義について」, 古代哲学研究 METHODOS 38, 34-50.

カッシーラー, E. (1994)『シンボル形式の哲学第三巻 (上)』木田元・村岡晋一訳 (岩波文庫)

田島正樹 (1996)「アリストテレス自然学ノート」, 東北芸術工科大学紀要3, 130-158.

千葉恵 (2004)「アリストテレスにおける力と運動」,『ギリシア哲学セミナー論集』Ⅰ, 1-21.
http : //wwwsoc.nii.ac.jp/gps/Ronshu/2004_index.html

藤沢令夫 (1980)「現実活動態」,『イデアと世界』(岩波書店) 所収, 231-326.